

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593508

研究課題名(和文) 認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」の開発

研究課題名(英文) The Development of the Intervention Program to Promote Understanding and Relations between Elderly People with Dementia and Their Family Caregivers

研究代表者

高見 美保 (Takami, Miho)

兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：50613204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、認知症高齢者と家族介護者の「互いの理解」や「現状に見合う関係作り」を支援する介入プログラム(60分/1回、計4回)を作成・実施し、両者12組、計24名の参加者の介入前後の変化を分析し、効果を検討した。

その結果、認知症高齢者の言語コミュニケーション能力と社交性の向上、家族介護者の介護肯定感が向上する傾向が検出された。更に、プログラム終了半年後には、家族が認知症高齢者の「好み」に応じて介護サービスを選択し、共に生活を楽しむ行動が見られ、介入プログラムの一定の効果が検証された。

研究成果の概要(英文)：This study was evaluate the effects with an intervention program (60 minutes / time, four times in total) to promote understanding and relations between Elderly People with dementia and their family caregivers (10 pairs, totaled 32 persons).

As a result, it was improvement of the communicative competence and the sociability of the elderly people with dementia, and the positive appraisal of caregiving for the family caregivers were detected. A half year of the program end later, some family caregivers chooses a care service depending on "preference of the elderly people with dementia and enjoying their daily life, they were shown that the constant effect of the intervention program was inspected.

研究分野：老人看護学

キーワード：認知症高齢者 家族介護者 関係性 看護介入 相互関係

1. 研究開始当初の背景

抗認知症薬の開発により、重度認知症高齢者への治療効果も報告されている(本間;2010)が、高齢者の場合は他疾患の合併(高血圧症、糖尿病、慢性心疾患など)や老化に伴う諸機能の低下から、治療効果に限界がある。そのため、認知症看護のアプローチとしては、非薬物療法としてのアクティビティケアで協調性や社会性を促進したり(平林ら;2003)、日常生活への基本的な環境調整で行動障害を押さえ、緩やかな病状経過をもたらす援助方法が確立されてきた。さらに、家族介護者には、介護に対する孤立感や負担感の軽減、介護方法の理解を促進させる心理・教育プログラム(水谷ら 2005)の実践研究数も増えている。しかし、認知症患者は家族から受ける影響で精神症状の増悪や改善が左右される(冷水;1989)ことや認知症高齢者の半数以上が在宅生活を送っているという現実に対し、認知症高齢者と家族介護者の関係に着目した研究は、決して多いとは言えない。このような現状をふまえ、高見(2010,2011)は、認知症高齢者と家族介護者が関わり合う際に生じる困難を解消・軽減することを目的とした看護介入プログラム(認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」)を開発した。そして、このプログラムを用いることで、1) 認知症高齢者の状況への認知や意思の表出、協調性が促進される、2) 家族介護者の認知症対応の理解と捉え方、相手に対する思いが深まる、3) 両者の思いが通い合うことを促進し、認知症高齢者の QOL の向上ならびに、家族介護者の介護負担感の低下と介護肯定感の向上をもたらすことが可能となることを明らかにした。しかし、この介入プログラムは1回/週、計8回(約2ヶ月)で継続的に実施されるため、日程調整の問題から参加を見合わせるケースが見られたこと、認知症の進行事例では“望ましい相互作用”の生起が低かったことから、認知症早期段階の事例でのプログラム検証と、認知症高齢者と家族介護者が参加しやすい、運用性あるプログラム

実施の検討が課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究では、1) 認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」の簡易版作成、2) 認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」の簡易版の実施と、その効果検証の2点とした。

3. 研究の方法

(1) 研究枠組み

認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版は、認知症高齢者が自分を表現する力や他者と協調する力を養う“アクティビティプログラム”、家族介護者への“心理・教育プログラム”、両者が相手を理解し、実際の関わり方を体験する“共有プログラム”の3つ内容を併せ持つ介入プログラムとして構成し、両者の「相互性」の歪みを回復させ、認知症高齢者の認知機能やQOLの改善、家族介護者の介護負担感の軽減と介護肯定感の向上を期待するものである。プログラム構成と効果を検証するアウトカム指標の関係を図1に示した。

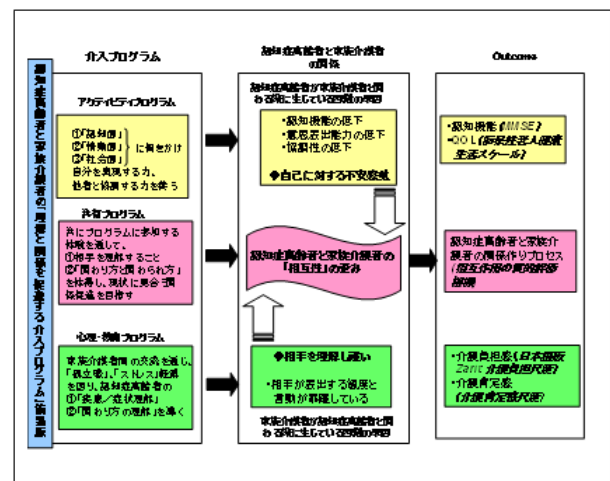


図1. 研究枠組み

(2) 研究デザイン

本研究は、地域で暮らす認知症高齢者とその家族介護者を対象とした準実験・縦断的比較とし独立変数・従属変数は表1の通りとした。

表 1. 研究デザイン

	準実験・縦断的比較
研究対象者	認知症高齢者と家族介護者
独立変数	認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版
従属変数	認知症高齢者 :東大式観察スケール
	家族介護者:日本語版 Zarit 介護負担尺度、介護肯定感尺度

(3) データ収集と分析方法

データ収集

a. **研究対象施設の選定**: 老人看護専門看護師、認知症看護認定看護師が関与する医療施設 3 箇所に研究趣旨を説明し、協力を得た。

b. **研究対象者の選定**: 協力施設に所属する老人看護専門看護師、認定看護師から、研究対象者(認知症高齢者と家族介護者)の推薦を受け、研究趣旨と倫理的配慮について説明後、同意を得た(認知症高齢者の同意は、家族の同意も含めて行った)。その結果、認知症高齢者と家族介護者 12 ペア、計 24 人の協力を得た。

(認知症高齢者;男性 7 名、女性 5 名、平均年齢 84.4 歳、家族介護者;男性 2 名、女性 10 名、平均年齢 66.0 歳)

c. **勉強会の実施**: 研究協力の得られた施設スタッフ(看護師)を対象に、研究の趣旨説明と、介入プログラムの実施手順と留意点について、資料を提示しながら勉強会を実施した。

d. 介入プログラム作成と、介入前の尺度測定

文献検討、認知症専門外来におけるフィールド調査(認知症高齢者の疾患名と病期、主要症状と家族に対する思い、家族介護者の介護負担感と介護肯定感の聞き取り調査、認知症高齢者への思い)を行い、先行研究(高見;2010,2011)を参考に「認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版を作成した(表 2)。

表 2. 認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版

	認知症高齢者	家族介護者
第 1 回	頭の体操 ~ ツボ押し ~	介護体験の共有 認知症と対応 ~
第 2 回	一緒にものづくり体験「苔玉づくり」	
第 3 回	家族に挨拶状 を送ろう	関わりを振り返る 健康管理・生活調整
第 4 回	一緒にゲームを楽しむ!「お手玉投げ」	

e. 介入プログラムの実施

3 つの医療機関で、「認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版」を実施し、全プログラム終了後に介入後の評価尺度の測定を行った。また、両者の相互性については、実施中のフィールドノートと実施後のミーティングで内容を確認し、記録した。介入プログラムの運営は、研究協力者の専門看護師、認知症看護の専門家(計 6 名)と共に行い、定期的に研究会議やミーティングを行った。

f. 介入プログラム終了 1 年後のフォローアップ

データ収集を行った 3 つの医療機関で、介入プログラム実施 1 年後に研究対象者に対し、フォローアップのための懇談会を行った。そこでは、本研究の結果を公表するとともに、終了後の認知症高齢者、家族介護者の日常生活の様子を聞き取り、介入プログラムによって、自分達に起きた「変化」についてフォーカス・グループインタビューを行い、その内容を記述にて記録した。

(4) データ分析

評価尺度得点(日本語版 Zarit 介護負担尺度、介護肯定感尺度)については、介入前・介入後、で得点の推移を比較し、t 検定で有意性を検証した(SPSS Statistics 22 使用)。認知症高齢者の東大観察スケールは、プログラム実施に伴う得点の推移を参加者毎に集計し、その変化をプログラム実施中の言動を基に、変化の意味を解釈した。また、認知症高齢者と家族介護者の関係(相互性)については、プログラムに参加する様子を記録したフィールドノートから、その内容を質的に分析した。尚、データ分析はプログラム

への欠席でデータ欠損が生じた1ペアを除いた、11ペア、計24人を対象とした。

4. 研究成果

(1) 家族介護者の介護負担感について

本研究において、介入前・介入後の日本語版 Zarit 介護負担尺度 (J-ZBI) の得点変化については有意差を検出できず ($p > 0.05$)、介入プログラムによる介護負担感の軽減は検証できなかった (図2)。

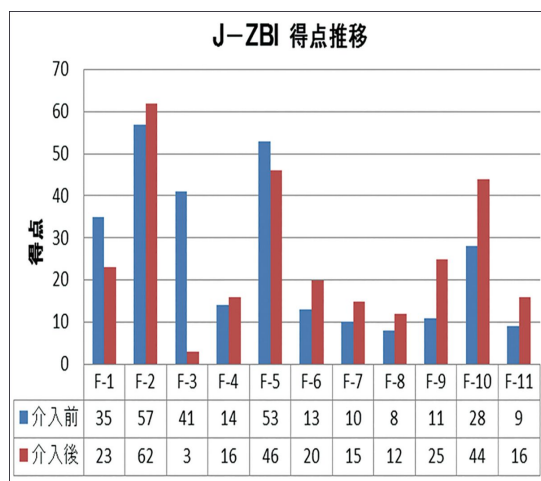


図2. 家族介護者の介護負担感の推移

(2) 家族介護者の肯定感について

本研究において、介入前・介入後の介護肯定感尺度の得点変化には、有意傾向が見られた ($p < 0.5$)。介入プログラムの効果として、明確な介護肯定感の向上を検証するには至らなかったが、家族介護者が、自分の介護に“肯定的な意味を見出そうとしている”様子は明らかになった (図3)。

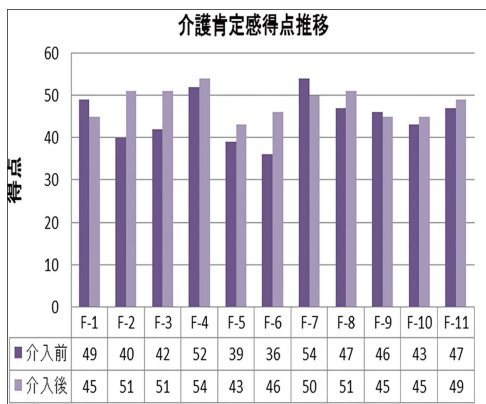


図3. 家族介護者の介護肯定感の推移

(3) 認知症高齢者の言語的コミュニケーション力と社交性

認知症高齢者に対し、介入プログラム実施毎に評価した東大式観察スケールの得点は、回を追うごとに認知症高齢者の言語的コミュニケーションや注意/関心の得点が向上した者が見られた。その者は、介入前には“寡黙で反応が乏しく、関わりのきっかけが分かり難い”と家族介護者が捉えていた者であったが、フィールドノートからは、プログラム参加に伴い、家族と声を掛け合い、他の参加者と場を共にすることを称え合う様子や、取り組みを評価する言動が抽出されており、本介入プログラムの最も効果の見られたケースとなった (図4)。

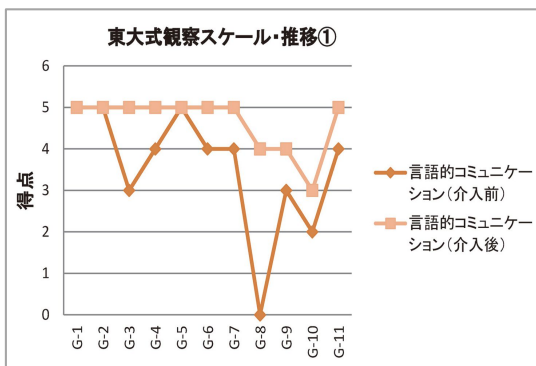


図4. 認知症高齢者のコミュニケーション力 (4) 介入プログラム終了後の変化

介入プログラム終了1年後のフォローアップ会では、参加した認知症高齢者全般的に、記憶障害やADLレベルの低下が見られた。しかし、全ケースで、在宅で共に暮らすことが継続できていた。また、「デイサービスで、手芸や工作をすることが意外と楽しい」という認知症高齢者や、「一緒にテニスできるように、スポーツクラブに行き出した。」「あんな取り組み、またして欲しい」と語る認知症高齢者と家族介護者もあり、介護だけでなく、共に楽しむ、という関係を持った様子が見受けられた。

(5) 考察

今回は、60分/1回、計8回の介入プログラムを、60分/1回、計4回に短縮した簡易版として再構成した。その結果、骨折による入院でプログラム不参加となった認知症高齢者1名以外に

離脱者を出さず、参加者の評価も高いことから、実用性ある看護介入プログラムとして一定の評価はできると考える。「介護負担感」は、知識や状況理解が深まるにつれて向上することもあるため、今回の介入で軽減しなかったことも、想定内ではあった。しかし、家族介護者にとって、「介護負担感」を誘発する出来事やその深さ(介護負担の質)によっては、両者の関係を一気に悪化させることもある。家族介護者の「介護負担感」を和らげる取り組みについて、プログラム内容や構成の再検討は必要と考える。また、初期段階の認知症高齢者を介護する家族に介護知識が増えることは、孤立を防ぎ、介護の準備性を育む反面、他の家族が体験している暮らしが“他人ごとではない”と見える怖さを自覚することにつながる。今後は、フォローアップ体制を組み込んだプログラム構成や、認知症のステージに応じた実施方法へと、改訂に取り組み、より人々の手元に届く実践介入プログラムに仕上げたいと考える。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計0件)
* 投稿準備中である

〔学会発表〕(計4件)

高見美保、大久保和実、稲野聖子、伊藤大輔、森山祐美、石橋信江、武林智子、認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」簡易版の評価、日本看護科学学会第34回学術集会、2014年11月29日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市熱田区)

高見美保、石橋信江、武林智子、加藤泰子、森山祐美、稲野聖子、西山裕子、認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラムの開発」～簡易プログラム作成の検討～、日本看護科学学会第33回学術集会、2013年12月6日、大阪国際会議場(大阪市北区)

高見美保、認知症高齢者と家族介護者の「理解と関係を促進する介入プログラム」の運用、日本老年看護学会第18回学術集会、2013年6月4日、大阪国際会議場(大阪市北区)

Miho Takami, Effects of the Intervention Program for Elderly People with Dementia and Their Family Caregivers in the Community, The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, February, 21, 2013,

Bangkok, Thailand.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高見 美保(TAKAMI, Miho)

(兵庫県立大学・看護学部・准教授)

研究者番号: 50613204

(2) 研究分担者

石橋 信江(ISHIBASHI, Nobue)

(兵庫県立大学・看護学部・助教)

研究者番号: 50453155

研究分担者削除(2014年3月20日付けで承認)

加藤 泰子(KATO, Yasuko)

(兵庫県立大学・看護学部・助教)

研究者番号: 70510866

武林 智子(TAKEBAYASHI, Satoko)

(兵庫県立大学・看護学部・助手)

研究者番号: 30632484

研究分担者削除(2014年3月20日付けで承認)

(3) 連携研究者

該当者なし